

## 教養教育をめぐる問題の構図について

### 1. 基本的な立場

大学の基本的使命：人間形成（人、市民、職業人）＝教養

組織としての特質：保守性と柔軟性

### 2. 戦後日本の教養教育をめぐる経緯の総括

#### (1) 戦後の学制改革による制度構築

「専門教育科目」と対置される「一般教育科目」と「外国語教育科目」等の導入

#### (2) 教養教育（一般教育科目や外国語科目）の空洞化・形骸化

①ソフトとしての理念（「民主社会の担い手」的理念的形骸化）

②ハードとしての装置

- ・教育課程（専門教育と教養教育とを異なるものに位置付けた上で、両者を4年間の学士課程教育の前半と後半に入れ込むという枠組みがもたらす物理的な困難さや理解の歪み）
- ・組織体制（「教養部」の持つ差別的構造）
- ・担う人（旧制高校や師範学校の教員の退職）

#### (3) 新たな要請の顕在化（新たな社会状況への対応やジェネリックスキルの育成）

（※しかし大学の基本的使命に立ち返ることを忘れずに）

### 3. 問題状況の理解と処方箋

#### (1) 教養教育の理念の今日的な再生（「空洞」への再充填）ということだけが課題なのか

①「教養教育」に対する固定観念の持つ歴史性・人為性を反省し、やせ細ってしまった専門教育の概念に、教養教育的な理念を再統合すること

→分野別参照基準の提案との整合（「世界の認識の仕方、世界への関与の仕方」）

（専門教育概念の拡張：分野に固有の倫理や社会的責任を通じた人間教育、自身の分野の相対化、ジェネリックスキルの育成）

②しかし専門教育の側からだけでは対応できない部分はある（新教養？）

（※学生のマス化・社会経済のグローバル化・科学技術の重要性を背景事象として）

- ・「新教養」（？）：現実世界の理解、価値に関わる学び、他者との連帯、ジェネリックスキル
- ・新教養の着眼点：既存の教育資源の積極的活用（古典教育、外国語教育等）
- ・学習方法の重要性（専門教育も同様）
- ・隠れたカリキュラム

#### (2) 支えるハードをどうするか

①教育課程と組織体制

- ・（かつてのような二分法ではなく）専門教育主体もしくは教養教育主体の課程編成と、それに即した組織体制（※中長期的に目指していく柔らかい方向性として）
- ・新しい学習支援体制の重要性

②人を育てることから始める必要性

- ・大学院教育の改善（プレFD）

#### (3) 大学の多様性・経営問題をどうするか

（※経営基盤の弱い中小大学はマス化した学生のボリュームゾーンでもある）

- ・大学間連携などの工夫
- ・国民の学習機会を保障するための公的支出の拡充

（大学教育の中核的要素としての教養の占める位置の再確認→公的な下支え）